

東日本大震災復興学生ボランティア 「大学生の参加経験に関するアンケート調査」概要

(2011年8月～9月 いわてGINGA-NETプロジェクトにおける調査結果 2012年3月26日)

岩手県立大学・学生ボランティアセンターが「いわてGINGA-NET」プロジェクトで県内被災地に受け入れた学生ボランティアを対象に、いわゆる「学士力」に関する自己評価について、同一回答者の活動前後の変化を調べた(回収数 1,018)。

集計結果や自由記述に示された学生の声を踏まえると以下のような点について傾向や課題が明らかになった。

(傾向)

○「コミュニケーション力」が伸びたと実感した学生が多い。

今回の活動は地域のコミュニティ支援が中心であったため、ボランティア参加学生には地元住民や学生同士との積極的な関わりが求められるなど、プログラム中に「コミュニケーション力」を意図的に発揮できるような配慮がされていたことも背景にある。

○もともと自己評価が高い傾向にあった「積極性」と「その他(想像力)」に、さらに磨きがかかったとの自己評価。

ボランティア活動を志望する者は、この2つの能力について、もともと高い自己評価傾向にあったと考えられるが、自己評価が低いと評価した学生も活動後には減少した。活動中に繰り返し実施された「振り返りのディスカッション」を通じて積極性が引き出され、他者への理解を深めたと考えられる。

○「協調性」についてはもともと高いと自己評価した学生が多かったが、活動後の評価はやや低下。

「集団や社会生活の規則やルールを守って適切に行動する力」「自分の考えだけにとらわれずに、自分とは違う考え方や立場も尊重して理解しようとする力」などの自己評価がやや低下。活動で出合った様々な困難や相互理解の難しさを感じながら、自らの能力の未熟さを自覚させられたと考えられる。

(課題)

◇全体として、ボランティア活動のインパクトは大きく、学生の「学士力」の自己評価に与える影響も大きい。

◇大学として学生ボランティア活動を支援する際には、活動プログラム自体に何らかの教育的配慮を持たせることが望ましい。

◇活動後に高揚感を持って大学に戻る学生が、正課における学習密度を向上させることができるよう、カリキュラム上の工夫等を今後検討する必要がある。

※調査の詳細及び学生の生の声(自由記述)は東日本大震災復興学生ボランティア「大学生の参加経験に関するアンケート調査」報告書(<http://www.kodaiyo.org/110311/gresults.pdf>)のP3～P26を参照のこと。

アンケート調査の内容

(1)実施主体

本調査の主体は、公立大学協会の「東日本大震災復興学生ボランティア等に関する作業部会(主査、竹内正吉)」である。

調査の実務は、大阪府立大学が行った。地域連携研究機構「地域福祉研究センター(センター長、山中徹)」を中心に、調査班を編成した。実務は、吉原雅昭、山野則子、山中京子、牧岡省吾、井手亘の5名を中心に行った。5名はいずれも、大阪府立大学人間社会学部の教員である。

(2)調査の対象

2011年夏に、「いわてGINGA-NET」が行ったボランティア活動に参加した学生全員を対象とした。この活動には、全国からさまざまな学生が参加した。ただし、期間中に「学生スタッフ」として活動した岩手県立大学の学生は、調査対象に含まれない。

(3)調査の目的

おもに、以下に示すとおりであった。

- ①この活動に参加した学生の属性、動機、活動内容などについて、事実を記録する
- ②参加者が活動において感じた困難を把握する
- ③先行研究で用いられている「学士力」15項目<注1>に関する自己評価を、活動前と活動後の2回質問し、その変化を調べる。

(4)調査方法

自記式の質問紙調査とした。無記名である。調査手順は、以下の通りである。

- ①活動現場にて、活動前に、参加者に専用の封筒に入れた質問紙を配布し、調査への協力をお願いする。封筒の表紙に、調査への協力依頼文が印刷されている。
- ②活動前に、質問紙の前半部分に回答し、いったん封筒に入れて、各自が保管する。
- ③活動終了後、質問紙の後半部分に回答し、封筒に入れたものを現地スタッフが回収する。

(5)調査時期

2011年8月から9月にかけて実施した。

(6)研究倫理

研究倫理に関する配慮事項をまとめ、大阪府立大学人間社会学部研究倫理委員会に審査を申請し、2011年8月4日に認められた。

(7)調査票の配布数と回収数

配布数は、1044であった。回収数は、1018であった。回収率は、98%であった。

<注1>例えば、木村二郎、難波美都里編(2009)『こんなものほしかってん』桃山学院大学・大阪府立大学・大阪大谷大学・帝塚山学院大学・羽衣国際大学・浦和学院大学キャリア教育・FD委員会(文部科学省平成20年度戦略的の大学連携支援事業[実践力のある地域人材の輩出]プロジェクト)、34ページ。

集計結果

①参加学生の属性、動機、活動内容などについて

- ①-I 参加学生について 2
- ①-II 参加者の所属する大学について 3
- ①-III 地域別参加者数(全体及び公立の学生) 3
- ①-IV ボランティア活動経験 4
- ①-V 事前学習について 4
- ①-VI 教職員の同行について 4
- ①-VII 参加理由 4
- ①-VIII 活動内容 5

②参加者が活動において感じた困難について

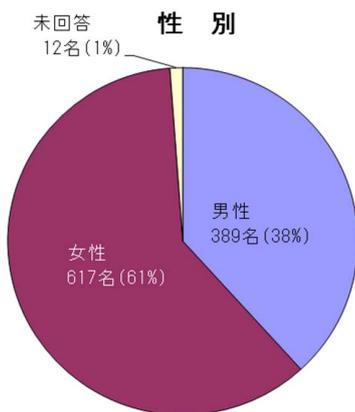
- ②-I 参加者が活動において感じた困難について 5

③「学士力」15項目に関する自己評価について

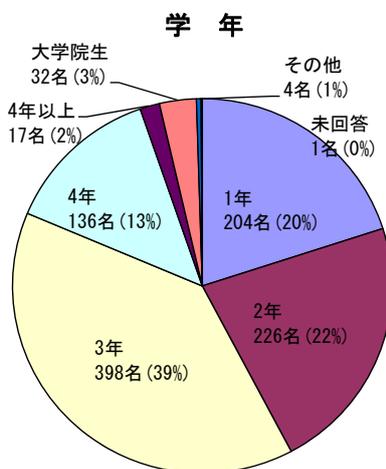
- ③-I ボランティア活動の前後における能力比較(自己評価) コミュニケーション力 6
- ③-II ボランティア活動の前後における能力比較(自己評価) 計画力 7
- ③-III ボランティア活動の前後における能力比較(自己評価) 積極性 7
- ③-IV ボランティア活動の前後における能力比較(自己評価) 協調性 8
- ③-V ボランティア活動の前後における能力比較(自己評価) その他(想像力) 8

①この活動に参加した学生の属性、動機、活動内容などについて

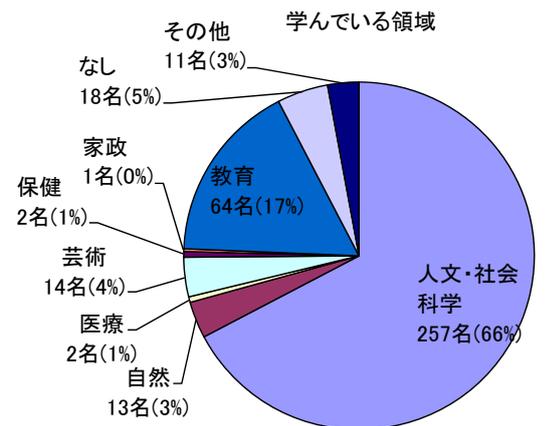
①-I 参加学生について



参加者の性別は、女性が6割、男性が4割と女性の参加者が多かった。



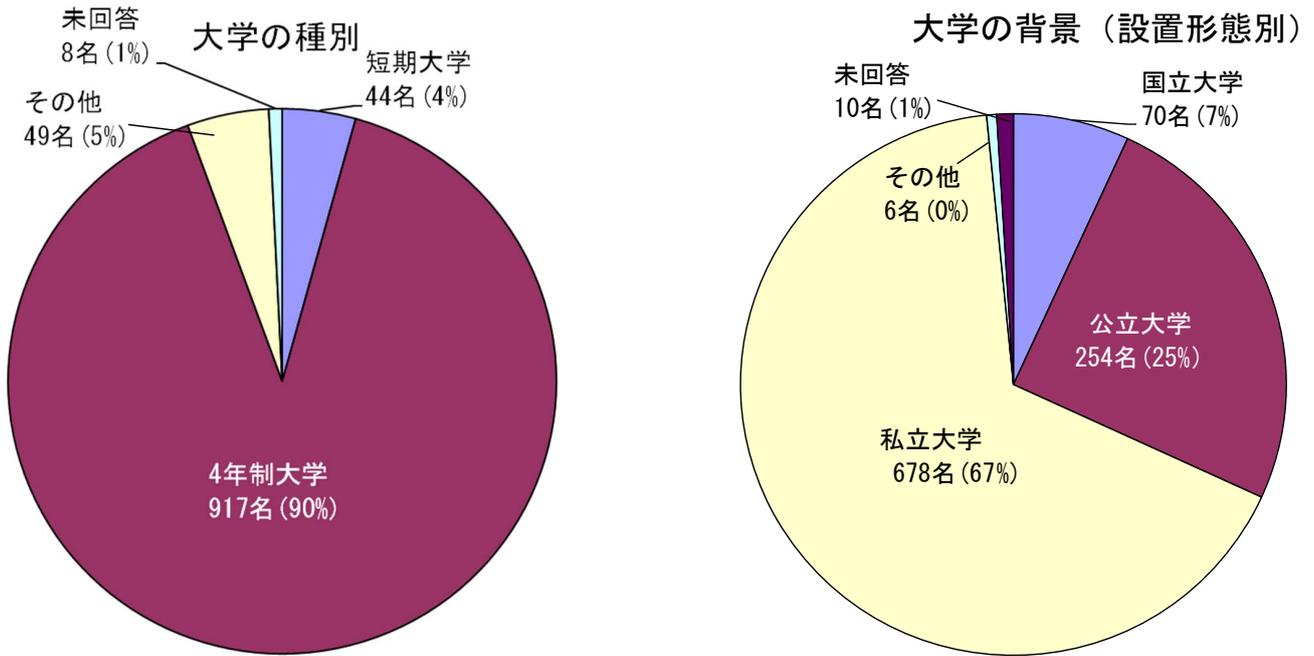
学年では、3年生が最も多く4割を占め、2年生、1年生はそれぞれ2割、4年生が1割余り、大学院生もわずかながら(3%)参加した。



学生の学んでいる領域は、人文・社会科学が3分の2を占め、教育系が2割弱を占める。学校基本調査(H23)によれば、全学生のうち人文・社会科学系の学生が占める割合は約50%であるのに対し、今回の参加学生に占める割合は64%と高くなっている。これは福祉系の学生の参加が多かったことに起因する。その他、各領域において全学生の占める割合と、今回の参加学生に占める割合を比較すると、教育分野が全学生の6.7%に対し、今回の参加学生は17%と比較的高くなっている。

※上記はアンケート回答を学校基本調査「学科系統分類表」に準じて分類した結果であり、報告書(大阪府立大学地域連携研究機構)の分類とは異なる。

①－Ⅱ 参加者の所属する大学について

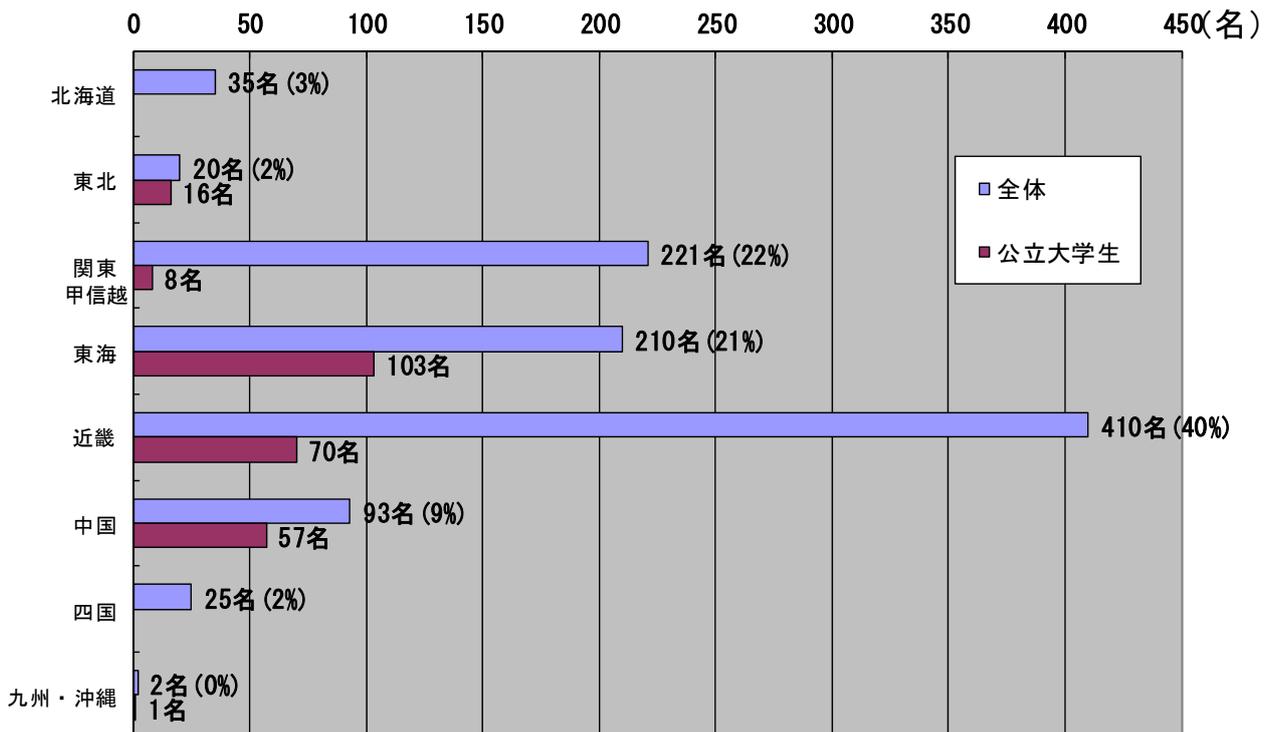


4年制大学が90%と多く、短期大学は4%、その他が5%である。大学の種別は、私立が67%、公立が25%、国立が7%であった。

参考 大学として組織的に「いわてGINGA-NETプロジェクト」に学生を派遣した公立大学

青森県立保健大学、岩手県立大学、静岡県立大学、愛知県立大学、愛知県立芸術大学、三重県立看護大学、滋賀県立大学、大阪府立大学、大阪市立大学、神戸市外国語大学、神戸市看護大学、島根県立大学、山口県立大学

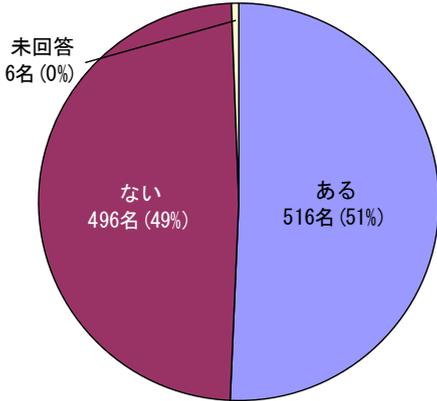
①－Ⅲ 地域別参加者数 (全体及び公立の学生)



大学の所在地で最も多かったのは、近畿で40%だった。以下は、関東甲信越22%、東海21%、中国9%、北海道3%、四国3%、東北2%と続く。公立大学で参加が多かったのは東海だった。

①-Ⅳ ボランティア活動経験

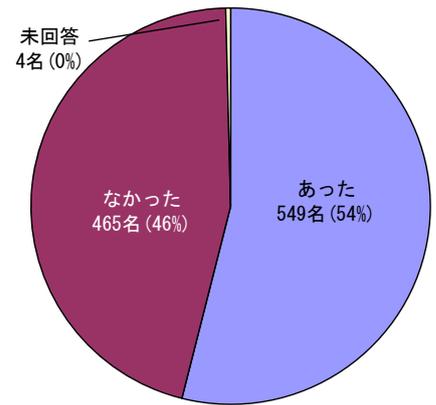
あなたは、今回の活動以外に過去にボランティア経験がありますか。



過去にボランティア経験がある学生とない学生が半数ずついた。

①-Ⅴ 事前学習について

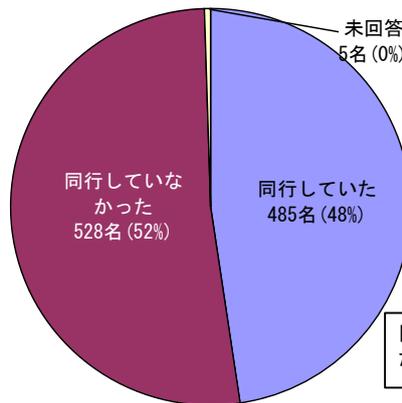
あなたの大学では、今回の活動に当たって、災害ボランティアに関する事前学習の機会がありましたか。



事前学習の機会があった学生が54%、なかった学生が46%であった。

①-Ⅵ 教職員の同行について

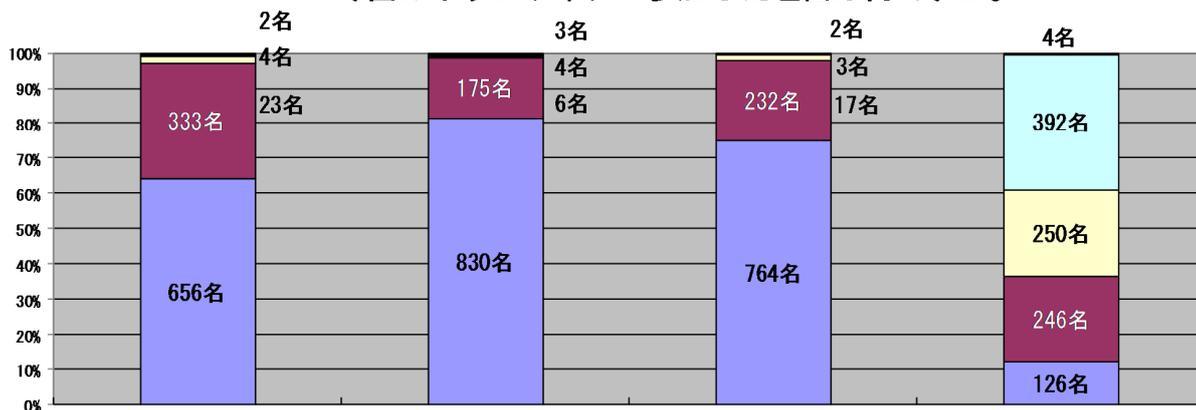
あなたの大学では、今回の活動に当たって、大学から教員または事務担当者が同行しましたか



同行したケースが48%、同行していなかったケースが52%であった。

①-Ⅶ 参加理由

今回のボランティアに参加した理由は何ですか。



被災地の方々を助けたいと思ったから

実際に現地に行つて、被災地の現状を知りたいと考えたから

この活動に参加することと考えると有意義だと考えたから

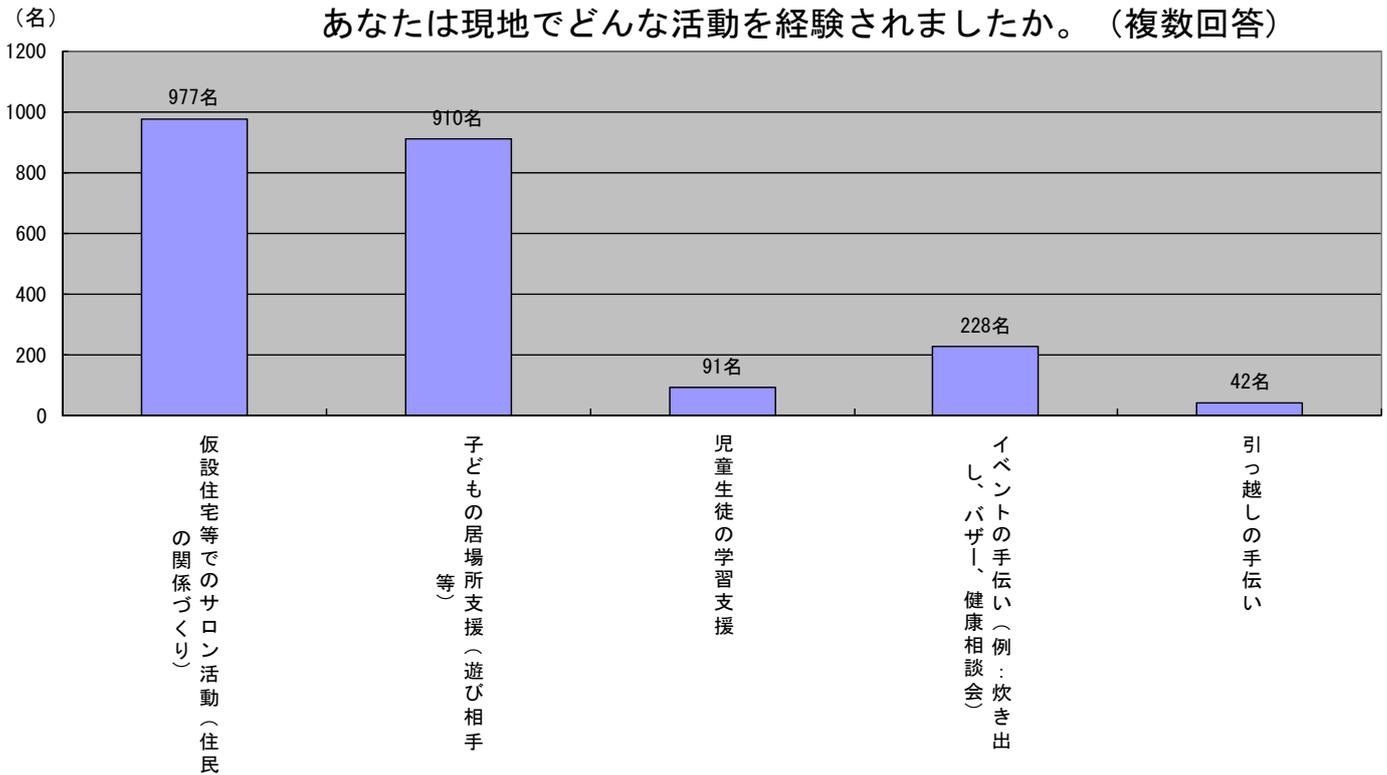
友人・知人あるいは教員に誘われたから

- 未回答
- まったく当てはまらない
- あまり当てはまらない
- まあまあ当てはまる
- とても当てはまる

「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」の回答数の合計数を見ると、「実際に現地に行つて、被災地の現状を知りたいと考えたから」「この活動に参加することは自分にとって有意義だと考えたから」「被災地の方々を助けたいと思ったから」がほぼ同数となった。一方で、「友人・知人あるいは教員に誘われたから」に対しては、「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」と回答した学生は、全体の36.5%を占めている。

①-Ⅷ 活動内容

あなたは現地でどんな活動を経験されましたか。(複数回答)

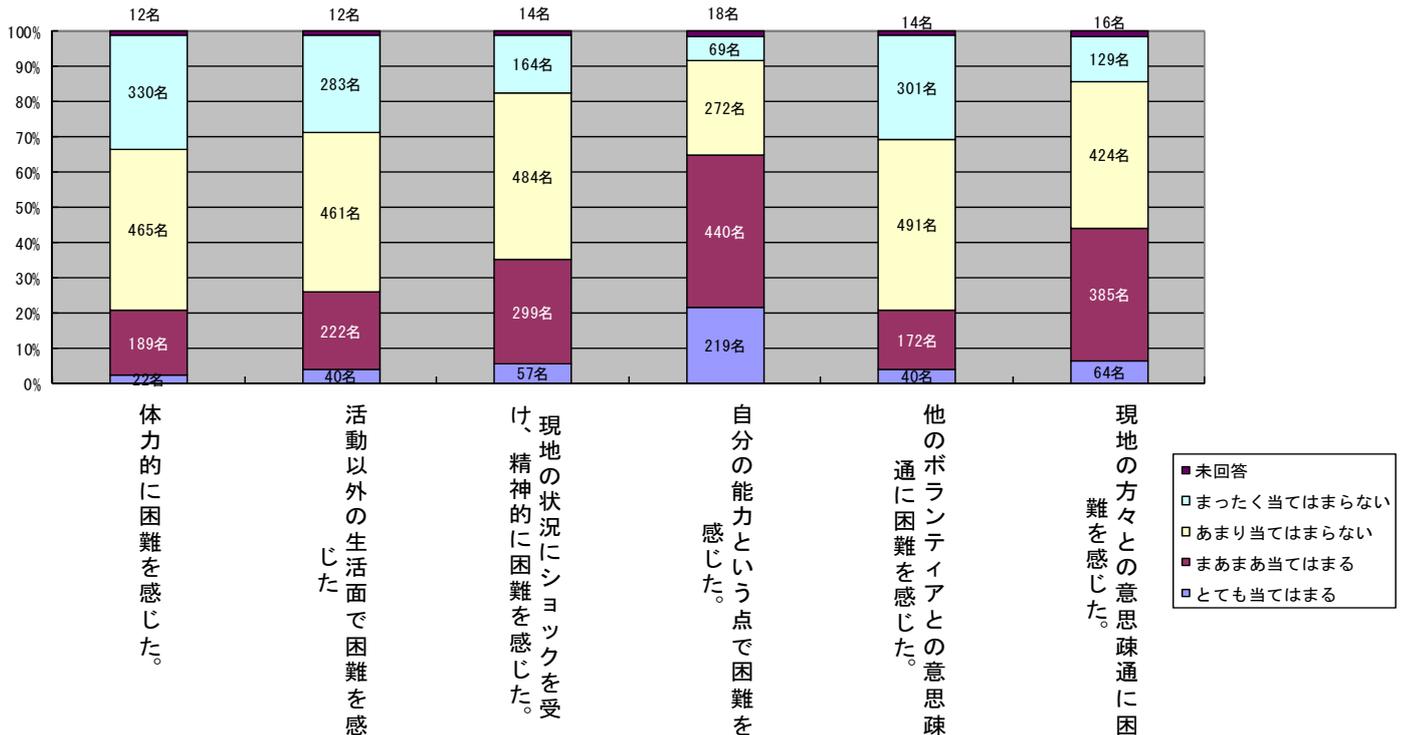


多い順に「仮設住宅等でのサロン活動(住民の関係づくり)」「子どもの居場所支援(遊び相手等)」「イベントの手伝い」「児童生徒の学習支援」「引っ越しの手伝い」となっている。

②参加者が活動において感じた困難について

②-I 参加者が活動において感じた困難について

あなたは、今回の活動において以下のような困難を感じましたか。



「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」の回答数の合計数を見ると、多い順に「自分の能力という点で困難を感じた」「現地の方々との意思疎通に困難を感じた」「現地の状況にショックを受け、精神的に困難を感じた」と続く。

③「学士力」15項目に関する自己評価について

○先行研究で用いられている「学士力」15項目に関する自己評価を、活動前と活動後の2回質問し、その変化を調べる。

※以下の15項目について、ボランティア活動の前と後に「あなたは、現在自分には下のような力がどのくらいありますか？」と質問し、「とても当てはまる」「まあまあ当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の4つ選択肢から、「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」と回答があったものを集計した。

※次ページ以降は、以下の15項目から抽出された因子を、因子負荷量の高い項目の内容から解釈した結果、名づけることができた4つの因子「コミュニケーション力」「計画力」「積極性」「協調性」に関連するグループとその他(仮に「想像力」とする)の5グループに分けて、それぞれボランティア活動の前後でどのように変化したかをグラフ化した。

コミュニケーション力

(14)	自分の考えや意見を相手が納得するように伝える力
(7)	自分の考えをわかりやすく整理して、相手に理解してもらえるように伝える力
(15)	伝えたい情報をわかりやすいように工夫して伝える力

計画力

(12)	自分に必要な情報や資料を探したり、選びだしたりする力
(4)	目標を達成するために解決すべき問題を見つける力
(5)	目標を達成するために方法やするべきことの順番を考えて準備する力

積極性

(1)	人から言われるのではなく、やらないといけないうちを見つけて、自分から進んで取り組む力
(2)	目標を達成するために周りの人に呼びかけて一緒に行動する力
(3)	言われたことをやるだけでなく、自分で目標を設定して粘り強く行動する力

協調性

(9)	自分の考えだけにとらわれずに、自分とは違う考えや立場も尊重して理解しようとする力
(11)	集団や社会生活の規則やルールを守って適切に行動する力
(8)	人が話しやすい雰囲気を作って、人の意見をきちんと理解して聞く力

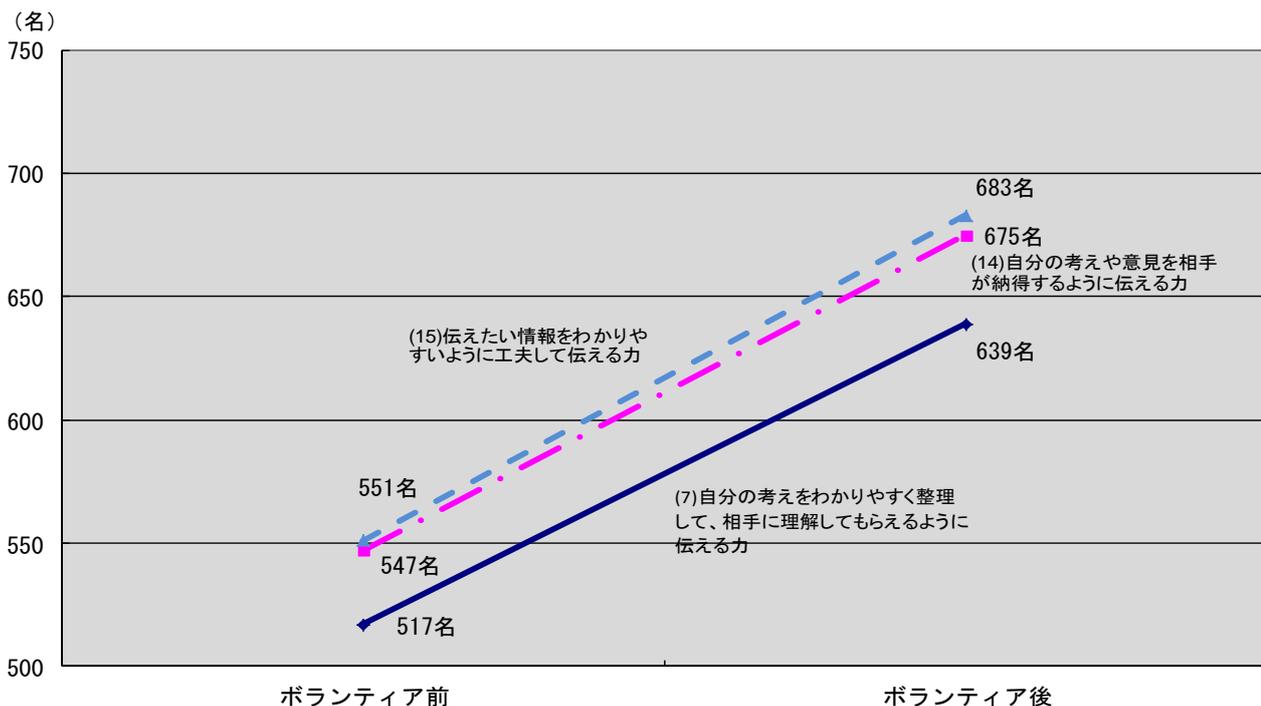
その他(想像力)

(10)	グループの中で、自分がどんな役割をすればよいのかを理解する力
(13)	学校で学んだことや体験したことを自分の生活や周りの人たちの仕事と結びつけて考える力
(6)	解決すべき問題について、解決方法を工夫して考える力

※記載の番号は、アンケート調査票における質問番号及び、東日本大震災復興学生ボランティア「大学生の参加経験に関するアンケート調査」報告書(<http://www.kodaikyo.org/110311/qresults.pdf>)における分析の項目番号と一致

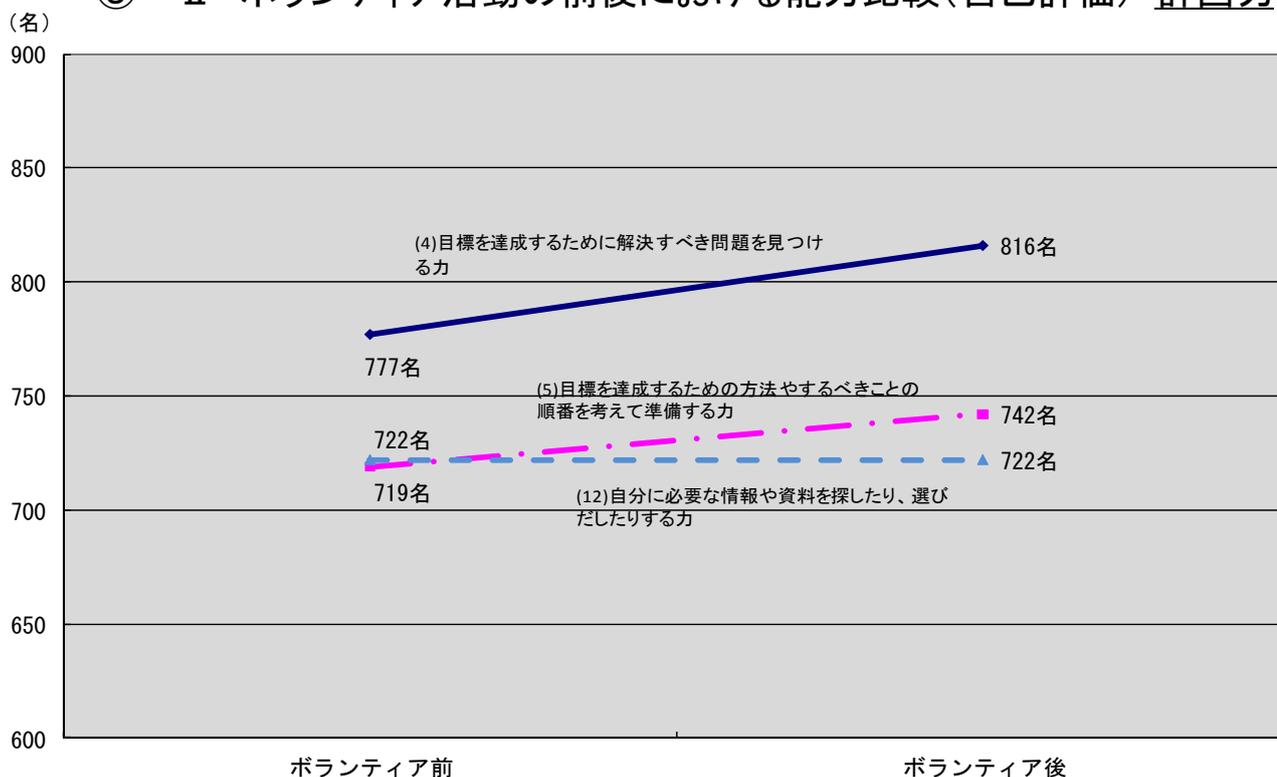
以下はボランティア前後において「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」と回答した人数の単純集計である。

③-I ボランティア活動の前後における能力比較(自己評価) コミュニケーション力



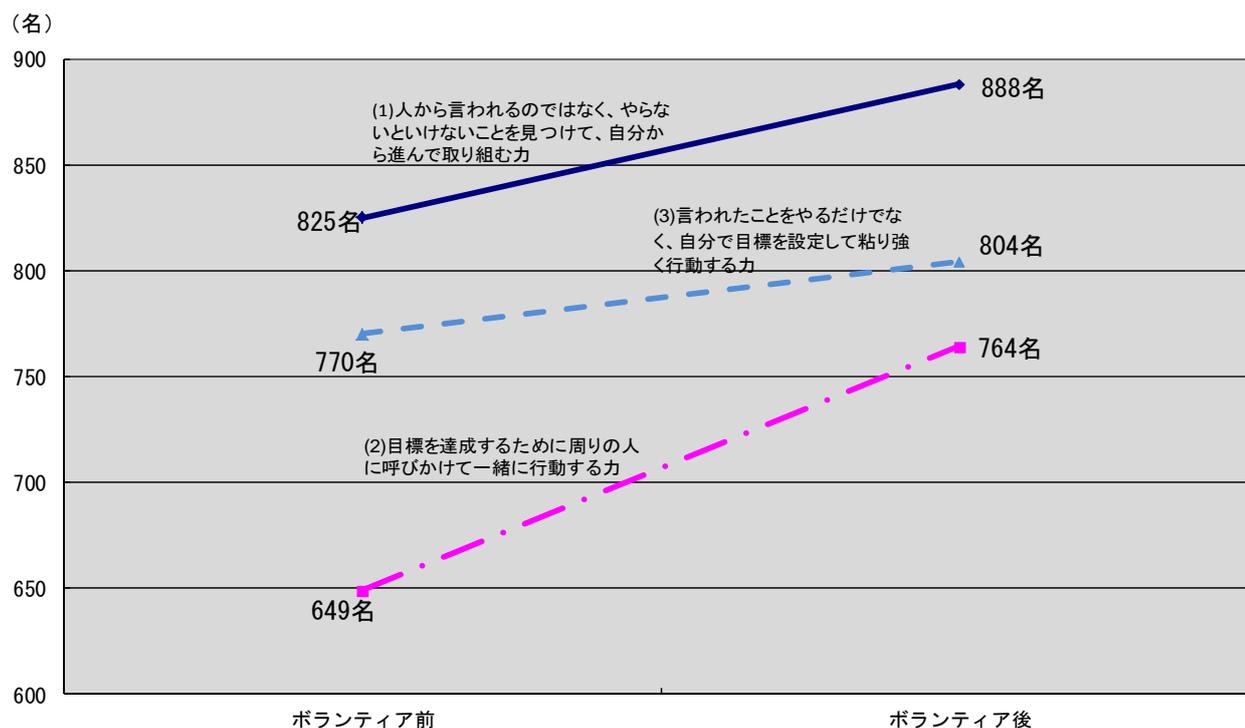
「伝えたい情報をわかりやすいように工夫して伝える力」「自分の考えや意見を相手が納得するように伝える力」「自分の考えをわかりやすく整理して相手に理解してもらえるように伝える力」については、のいずれの能力も、ボランティア活動前より、ボランティア活動後に「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」と感じた学生が多い。

③ーⅡ ボランティア活動の前後における能力比較(自己評価) 計画力



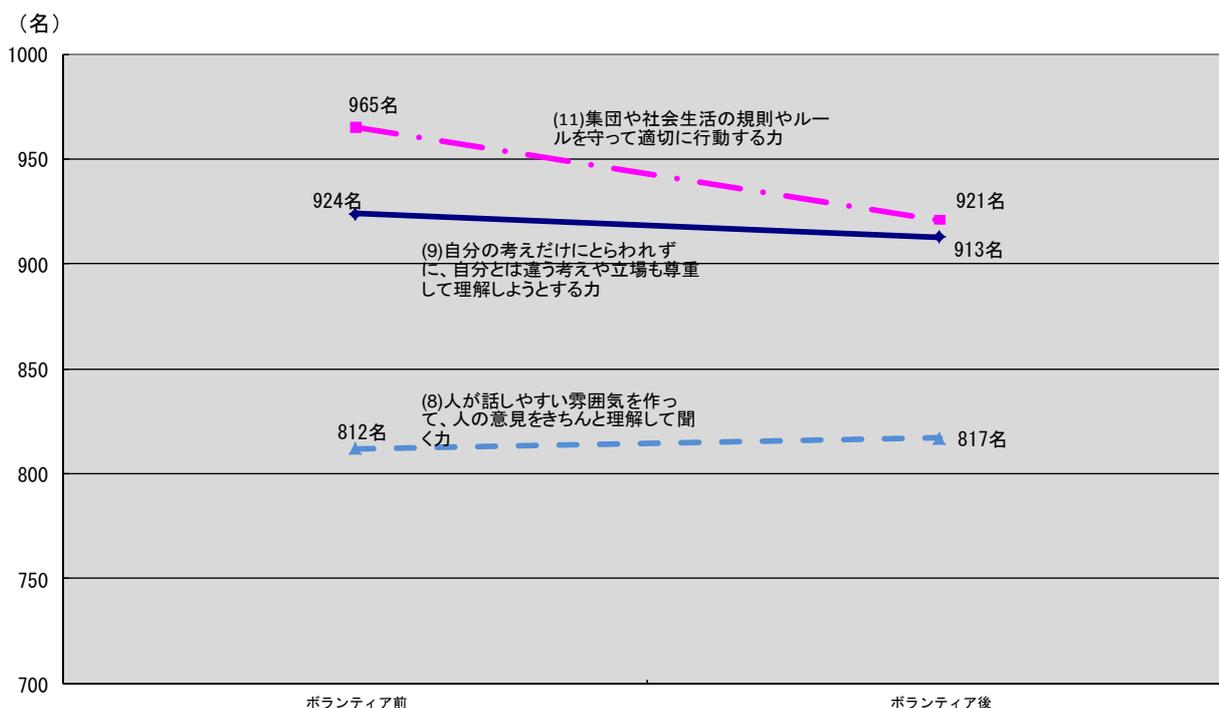
「目標を達成するために解決すべき問題を見つける力」「目標を達成するための方法やすべきことの順番を考えて準備する力」については、いずれもボランティア活動前よりボランティア活動後に「とても当てはまる」「まあまあ当てはまる」と感じた学生数が多くになっているが、「自分に必要な情報や資料を探したり、選びだしたりする力」については、ボランティア活動の前後でほとんど変化が見られない。

③ーⅢ ボランティア活動の前後における能力比較(自己評価) 積極性



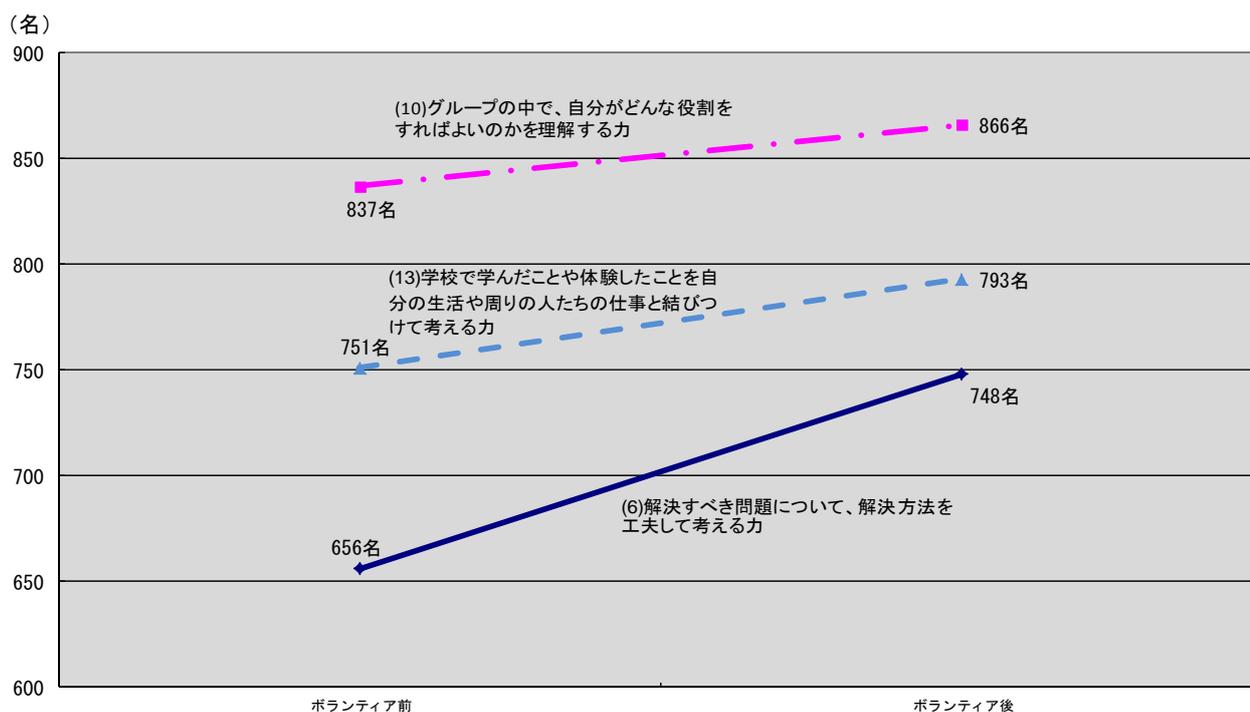
「人から言われるのではなく、やらないといけないことを見つけて、自分から進んで取り組む力」「言われたことをやるだけでなく、自分で目標を設定して粘り強く行動する力」「目標を達成するために周りの人に呼びかけて一緒に行動する力」のいずれの能力も、ボランティア活動前より、ボランティア活動後に「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」と感じた学生が多い。

③-Ⅳ ボランティア活動の前後における能力比較（自己評価） 協調性



「集団や社会生活の規則やルールを守って適切に行動する力」「自分の考えだけにとらわれずに、自分とは違う考えや立場も尊重して理解しようとする力」のいずれの能力も、ボランティア活動前よりボランティア活動後に「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」と感じた学生が減少し、「人が話しやすい雰囲気を作って、人の意見をきちんと理解して聞く力」はボランティア活動の前後でほとんど変化が見られない。

③-Ⅴ ボランティア活動の前後における能力比較（自己評価） その他（想像力）



「グループの中で、自分がどんな役割をすればよいのかを理解する力」「学校で学んだことや体験したことを自分の生活や周りの人たちの仕事と結びつけて考える力」「解決すべき問題について、解決方法を工夫して考える力」のいずれの能力も、ボランティア活動前より、ボランティア活動後に「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」と感じた学生が多い。